

本研究では中学校教員を対象に行った質問紙調査の結果を受け、大学生の授業理解を深める単元の主題を「コミュニケーションと美術」に定め、ベテラン教員である共同研究者が行っている単元や温めていたアイデアをベースに単元例を創作した。なお、以下にあげる指導案は、「東京学芸大学紀要、芸術・スポーツ科学系第 71 集(令和元年 10 月) pp.57-67」に掲載されたものに作品例図版を加えたものである。

#### ■図画工作科単元例

指導：大櫃重剛

#### ■美術科単元例 1

指導：濱脇みどり

#### ■美術科単元例 2

指導：大根田友萌

# 教員養成学部生が 深い学びを作るための モデル授業指導案

## 図画工作科単元例

### 指導…大櫃重剛

#### 題材名

「次はどこへ? カメレオンの旅」

#### 対象学年

小学校第6学年(全2時間)

#### 単元の目標・価値

カメレオンの形をした紙片を身近な場所の特徴(色・陰影・質感など)に合わせて着色して一体化させる活動Aと、デジタルカメラで班の友達が再現した擬態をコマ撮りアニメにして連結させていく活動Bを組み合わせることで、互いの発見や工夫のよさを認めながら自分のイメージを伝え合う過程で新たな発想を生み出す面白さを味わう。

#### コミュニケーションについて

小学校高学年になると、子どもたちは自分が発見したことや表現にこめた思いについて自ら露呈しなくなり、表面的に称賛されることに満足しなくなる傾向がある。しかし心の奥底では自身の発想や成果の価値を再確認したい願いがあり、作品の魅力や工夫のよさを伝え合う場面を通して学習意欲を高めていく。本単元では、特設された鑑賞学習ではなく、造形活動に没頭する子どもたちの間に自然発生的で能動的な学び合いを起こしたいと考え、「表現と鑑賞の連続/往還」をテーマにかかわりの場を設定した。

#### 教師の価値観と

#### コミュニケーション主題の関連

ている対話の内容に注目させたい。自分の紙片が友達のカメレオンへと擬態していく場面で起こりうる驚きや感動に立ち会い、双方の思いをつなぐための豊かな声かけや支援を試みてほしい【図1・2】。

者) 同士の関係性により意味が生成される空間的・心理的な余白、(3)発想の連続や練り直しを促す活動プロセス、(4)試行錯誤の途中経過について語り合う環境、(5)発達段階に適した伝達表現の方法やタイミング、が考えられる。従来の単元構成では、前述の活動A(全2時間)と活動B(2時間)を別々に実施していた。今回これらを組み合わせることで、授業時数の捻出とともに、思考過程における学習効果が高まることを期待した。

**4** 大学生への意識…本単元の指導観として、紙片を周囲と一体化させるための物の見方や着色のスキルを駆使させるだけでなく、子どもたちが場所選びや撮影のプロセスで物語つ

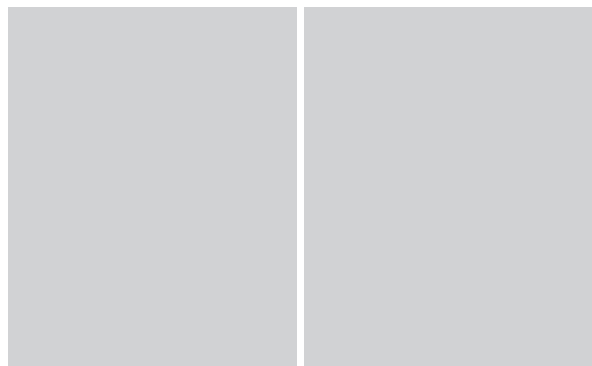
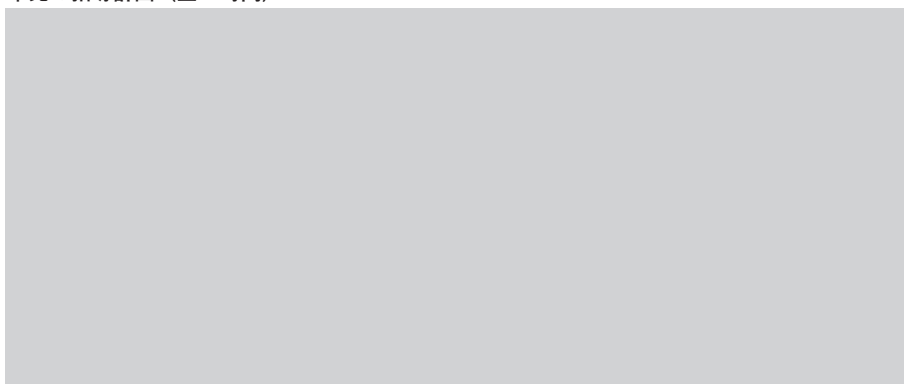


図1 児童作品「電のコカメレオン」 図2 児童作品「筆缶カメレオン」

#### 単元の指導計画(全2時間)



**1** ほんとうに教えたいこと(日々根底にある永続する価値観・願い)…同じ立場(条件)で身のまわりの事物や環境を見つめる視点には、自発的な鑑賞場面を生み出す動機づけが存在し、そこで感じ合う発想の差異や構想のプロセスを大切にしたいということ。

**2** 単元のもつ本質的な問い…「場の変移により、ある形がもつ色や質感の特徴に新たな意味が生まれるか」について協働的に探る。

**3** カリキュラム・子どもとの関連…子どもたちが自信を持ちながら想像したことをもとに学び合う場をつくるには、以下のような5つの要素、(1)始めに取りかかりやすい条件設定と明快な動機づけ、(2)作品(作

題材名

「お宝紹介！」

～『○○さんご愛用の…』～

対象学年

中学校第2学年（全2時間）

単元の目標・価値

友達の「お宝」を紹介するプレゼンシートを制作し、それを紹介しあう活動を通して、伝えることに関わる美術の見方・考え方や働きなどについて理解を深めるとともに、伝える合うことの面白さや難しさなどについて考えを深める。

コミュニケーションについて

コミュニケーションは「伝えたい」

扱われてきたが、多くの場合、個人で取り組む学習課題であった。それに対し二人組で取り組む本題材は、学習の過程で何度も受信・発信のやり取りが繰り返される。このやり取りを通して「お宝」の実物の存在感（色・形・材質感など）や持ち主の思いなどを深く感じ取り、そこから生み出された主題を表現するための「レイアウト、キャッチコピー、配色、書体」などの造形要素の重要性を理解するとともにそれらを使いこなす力をつけていく。二人組がクライアントと制作者に成り代わりながら、お互いの「お宝への思い」を一枚のプレゼンシートにまとめ、紹介しあうことを通して、コミュニケーションや美術の見方・考え方の意義や価値

「知りたい」という双方の思いから始まり、「伝わった！」「分かった！」という思いで一段落する。しかし一段落までの間には様々なやり取りが必要で、それこそがコミュニケーションである。「コミュ障」という言葉が示すようにコミュニケーションに苦手意識を持つ人も少なくないようだが、様々な受信・発信による「伝わった・分かった」感を積み上げることで、それぞれの個性に沿ったコミュニケーション力がアップしていくことは、幸せな人生につながると思う。

教師の価値観と

コミュニケーション主題の関連

1 ほんとうに教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）…学

値、そしてともに学校生活を送る仲間の有り様についても、理解を深められることを期待する。

4 大学生への意識…日常的にSNSなどを使ってコミュニケーションを楽しくしている大学生に対し、そのような行為にはたくさん美術的な見方・考え方が介在しており、日々そのような行為を繰り返すことを通して、学んでいる（感性を研ぎ澄ませている）という意識を持ってほしい。そして、私たちの日常的な行為が中学校美術授業の題材にもなりえるものだという捉えもしてもらいたいと思う。

校で学んでいること＝「美術の見方・考え方」＝「どんな感じ？」「どうやって表す？」は、実生活の様々な場面で生かされているということ。筆者が生徒と造形活動を行う際に、常に掛け続けているのがこの「どんな感じ？」「どうやって表す？」である。美術の授業の中でこの問いに基づいて感じたことを掘り下げ、形にし、交流しあうことから育まれる力は、自分たちの生活や社会とリアルにつながっていることを実感させたい。

2 単元のもつ本質的な問い…美術の見方・考え方は、コミュニケーションに、どのように使えるのか？

3 カリキュラム・子どもとの関連…ポスターやマークなどに表す表現活動は伝達デザインの題材として永く



図3 生徒作品

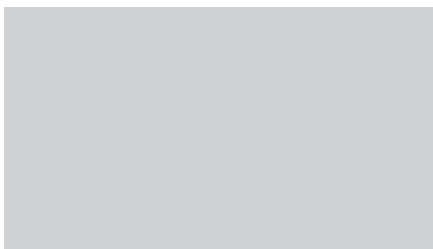


図4 生徒作品

## 美術科単元例2

### 指導…大根田友萌

コミュニケーションについて コ

#### 題材名

「アートの力!? メッセージ展」

#### 対象学年

中学校第2学年（全2時間）

#### 単元の目標・価値

社会へのメッセージ性のある展覧会をグループで企画し、「アートの発信者」としてアートとの関わり方に働きかける。また、グループ活動において、展覧会テーマの「共通」と、各自が選ぶ展示内容の「差異」のもと、展示内容の検討におけるコミュニケーションを通して、鑑賞のみかたの拡張と内容の深化を促し、アート鑑賞に親しむ姿勢を養う。

コミュニケーションは、自己を発信し他者に受信してもらうこと、他者からの発信を自己が受信すること、そして、これらのやりとりの中で自己理解や他者理解をしたり、みかたの広がりや深まりを生み出したりしていくことである。コミュニケーションは、今日の学校教育において重要なエッセンスと捉えている。そしてコミュニケーションを介した学び合いの場合は、学習活動や学習内容における生徒の興味を引き出すことができ、その中で仲間との経験の共有が増えることにより、一層に興味を引き出すことができる。また、そこからの興味関心の高まりは、その学習

#### 単元の指導計画（全2時間）

効果の高まりを促すと考えている。

#### 教師の価値観と コミュニケーション主題の関連

**1** ほんとうに教えたいこと（日々根底にある永続する価値観・願い）…生徒に育ませていきたい姿として、「学び問いつける力」を軸にしている。それは、子どもを基点として、生涯にわたり、学びと問いの営みの中で、主体的に関わり続けようとする力のことである。自己に問い、他者に問い、そして自己にまた問う営みを繰り返しながら、学びの深化と拡張を繰り返す力である。本質的な学びとは、一問一答のような完結的習得には終わらない、無限の広がりを持つものであると考える。中学校での教育において、短期的な視野での知識・

技能の習得に終わらず、長期的な視野を持ち、子ども自身が生涯に渡って拡張し、深化し、変革し合いながら、「学び問いつける力」が培えるような働きかけを探っていきたい。そして、「学び問いつける力」を探究するための美術科の在り方とは、視覚的、造形的、体験的な美術の活動を通して、生徒自身が人の生と美術との関わりについて考えを築くことと考える（生徒が築く美術）。

**2** 単元のもつ本質的な問い…この単元での本質的な問いは、「自分にとってのアートとは」、社会の中でのアートの機能性を意識した「メッセージ性あるアートとは」である。「自分はアートというものをこう考えている（自分のアート観）」を起点とし、生

徒が視野を広く持つて展示内容を収集させたい。また、社会におけるメッセージ性あるアートに着目し、アートの機能性を意識させる機会とした。また、この題材について、社会へのメッセージとしてのテーマがグループ学習での「共通」の基軸としたとき、そこに起こるみかたの「差異」から自己や他者への理解をし、鑑賞対象の特徴や効果、魅力について着目できると考えた。また、自分の考えを相手に伝えることや他者とのコミュニケーションを図ることにより、みかたを拡張させるだけでなく、自身の考えを深化させていくという効果があるとも考えている。

**3** カリキュラム・子どもとの関連…「学び問いつける力」を探究するため

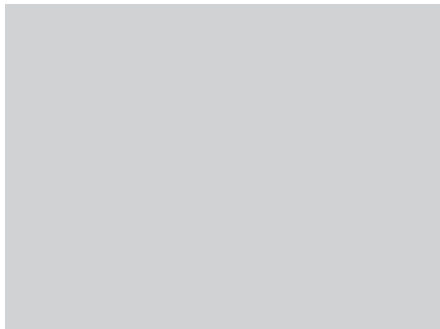


図5 生徒作品の一部

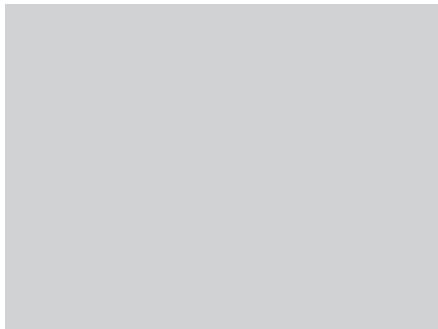
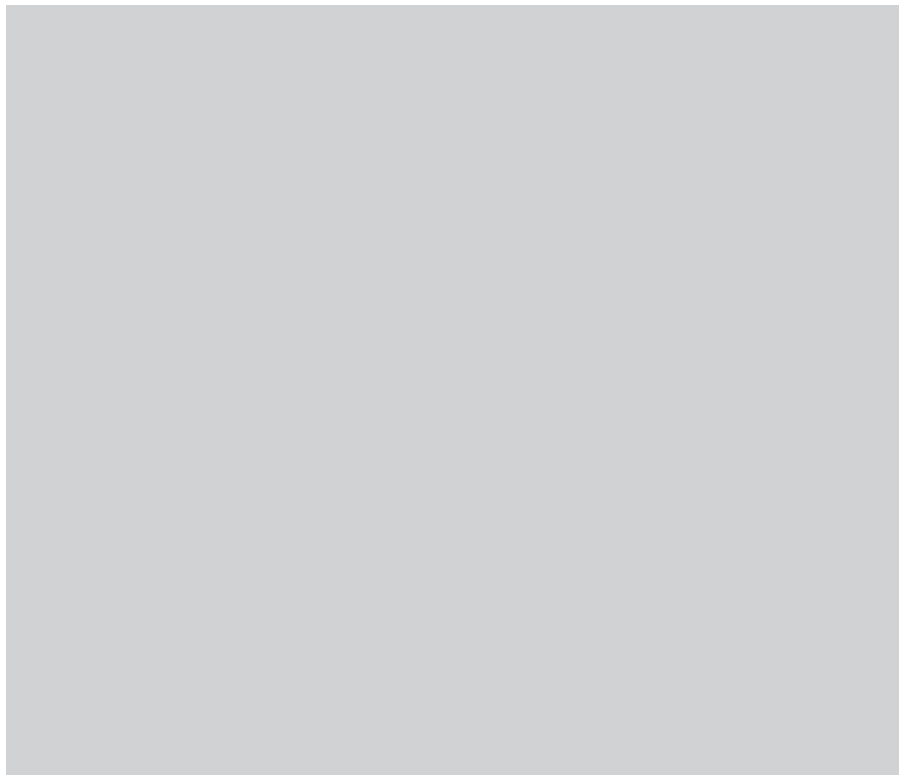


図6 生徒作品の一部

#### 単元の指導計画（全8時間）



の美術科の在り方として、「生徒が築く美術」をおいている。視覚的、造形的、体験的な美術の活動を通して、生徒自身が人の生と美術との関わりについて考えを築くこと、一人の生徒が、仲間とともに新しい物事と出会ったりみかたを変えたりしながら思考を巡らせ、他者とともに、自身の内にある思いや願いや考えを見出し、自己の価値観を築きながら、生きる姿に波及していくことを目標にしている。そのための手立てとして、中学校三年間のカリキュラムを通して「自分にとってのアートとは？」という問いを生徒一人一人に預けている。「アート」という言葉とその実態の捉え方は、時代によって、社会によって、個人によって異なり、また

変化し、その捉え方はあいまいさと柔軟を持つ。そうであるのであれば、その「アート」という言葉について、生徒自身がその意味や存在の定義を構築できるキーワードとなると考えた。アートであるものとアートでないものとの境界に対して、学習活動を通して問いを重ねていく。この題材においても、自分のアート観を基準にメッセージ性のある展示アートを選んでいる。また、ここに紹介する題材は中学校2年生での活動であるが、社会性への意識の高まりが伺える時期に働きかけていきたい課題でもあった。アートが自己を表現するものだけにとどまらず、社会において何らかの機能性をもつ存在として、見直す機会としたかった。

**4** 大学生への意識…「生徒が築く美術」の授業において、「教師が教える」ことが中心にあるのではなく、「生徒が問う」ことが中心にある。そして、生徒が主体的に問うことのできる環境を作り出していくために教師が存在するということが役割の中心にあるということ伝えていきたい。「問い」についての答えを持っているのは生徒たち自身であり、教師は生徒たちの持つ「問い」を深めるための手立て（情報の提供やみかた、展開、環境、声掛け等）を必要な時に与えていく存在であるということである。